検討委を設置 生産の試験を開始する

漁業関係者や村は平成14年10月、未利用資源としてコンブを活用した商品化を目指そうと、漁業関係者など11人で「コンブ等加工残さ有効利用検討委員会」を発足。コンブの再利用について話し合い、15年2月には、コンブなどの海草類や魚介類の堆肥生産が進んでいる北海道の先進地視察を行いました。

その後、検討を重ね同年6月、養殖コンブ未利用資源を使った堆肥造りを和野山地区のいわてくじ農協堆肥製造施設で試験的に生産しました。堆肥造りはコンブと牛ふん、木材片、微生物活性化資材を混合させ、一週間ずつ間を置き、切り返しを行いながら、約4カ月発酵させます。

堆肥は同年9月に完成し、和野山農地開発地区や黒崎地区でホウレンソウやニンジン、ミニトマトの栽培に試験的に使用されました。

●漁業を営む
金子　智（さとし）さん
（黒崎・50歳）

ぜひ、成功してほしいです

われわれ漁師の役目は、まずコンブをウニやアワビの餌にすることです。年によっては、アワビやウニの餌の天然ワカメやコンブが、不足していることがあるからです。そして、さらに漁業者の未利用コンブが堆肥になり、農業者にも還元されることは、お互いにメリットがあり、素晴らしいことです。ぜひ、成功してほしいです。

引き続き製造 作物の育成調査進める

村で取り組んだ堆肥造りは順調に進行。15年に続き、16年もホレンソウやニンジンなどに使用されました。

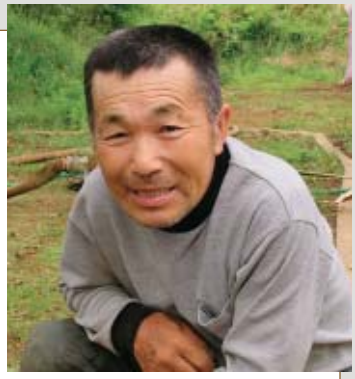
村農林商工課の上戸鎖栄樹（かみとさかえき）技師は「コンブ堆肥は一般の堆肥に比べ発酵温度が高いので、雑草の種子が死に、雑草が出にくくなっているようです。土も柔らかく、作物の根張りも良く、丈夫に育つため収量も増えています。2年、3年と使えば、さらに効果が出てくると思います」と試験栽培の状況を説明しています。

建設水産課の佐々木健一係長は「コンブの栄養分が堆肥に還元できるよう、今後も研究を続け、良質な堆肥を造っていきたいと思います」と話していました。

本年度も既に5月下旬から約150トンの栄養豊富なコンブの根元部分を主に使い、堆肥造りを進めています。9月末には約110トンの堆肥が出来上がります。この堆肥は村内で販売する予定で、販売価格は1トン当たり5千円前後を考えています。

漁業系未利用資源が地元農業に還元される――この養殖コンブの堆肥化の成功には漁業者や農業者の未来が託されています。

コンブ堆肥を使ってホウレンソウを栽培する畠山長次郎さんのビニールハウス。きれいな緑色のホウレンソウが育っています



●農業を営む
畠山長次郎さん
（黒崎・67歳）

雑草が少なくなりました

コンブ堆肥を使って今年で3年目になります。十分に発酵されている肥料なので、雑草の種が死に、ほとんどなくなり、仕事がしやすくなりました。畑に満遍なく肥料がいき届いているので、土も軟らかくなったようです。ホウレンソウの葉っぱの色合い、肉付きも良くなりました。とってもいいですね。

●海藻肥料の特徴

海藻を肥料として田畑に利用することは、日本をはじめ、中国、ヨーロッパ沿岸部で古くから行われてきました。成長促進や食味改善の効果が期待されるといわれています。

海藻肥料には①分解が早い②雑草の種子や病菌の胞子、害虫卵などが混ざらない③海水中のカルシウム、カリウムやミネラルが多い④ヨウ素や食塩が作物の生育を促進する――などの特徴が挙げられます。